

S・フロイトによる「性本能」概念の解体

—— 精神分析におけるセクシュアリティ ——

古川直子

1 はじめに

近年、ジェンダー／セクシュアリティをめぐる排除や差別が社会の問題として広く認識されつつある。社会学においても、非異性愛者やトランスジェンダー等、性的マイノリティと呼ばれる人々の社会的処遇が注目され、従来の異性愛カップルを中心とした制度が問いかえられている。そのなかで、生殖を中心とする異性愛を正常とする社会的規範に対して、セクシュアリティの多様性が論じられてきた。人間のセクシュアリティは生殖を目的とする性本能と同一視できない可塑性をもつ、というのがその主張である。

M・フーコーは「性本能」という概念の形成を、「1840-1850年以來、精神医学に認識論的かつ政治的な任務として課されることになる、本能とセクシュアリティとについての双生児的理論の練り上げ」(Foucault 1999=2002: 308、強調引用者)に見出している。すなわち、精神医学における「本能とセクシュアリティとの統合」(Foucault 1999=2002: 308)によって、「性本能は、生物学的かつ心的に自律した本能として切り離された」(Foucault 1976: 138=1986: 135)のである。

ここから精神医学／性科学は生殖に寄与する異性愛以外の性を倒錯として病理化していくが、セクシュアリティの可塑性／多様性の主張はこれに対する異論として提起されたのであった。S・フロイトの精神分析はこの「生殖に結びつかない性」への着眼の理論的源泉の一つであり⁽¹⁾、たとえば性本能という観念に対抗するものとして次のように解釈されてきた。

セクシュアリティに関する精神分析的定義の独自性は、フロイトの用語選択にも見受

⁽¹⁾たとえば、社会批判の文脈でフロイトの「多形倒錯」という概念に注目する論者として、Marcuse (1955=1958)、Brown (1959=1970)、Hocquenghem (1972=1993)が挙げられる。

けられる。「リビドー」「欲動」といった用語は本能と同化しえない。精神分析においては、セクシュアリティが本能の問題ではないことを臨床経験が証明している。もし本能の問題であるなら、男女の関係もオスとメスの出会い、あるいは精子と卵子の出会い以上に、複雑なものではないだろう。人間主体においては、種の再生産によって定義される自然の秩序が無意識の存在ゆえに攪乱されることを、臨床例が示している。(Wright ed.1992=2002: 224)

すなわち、「フロイトの欲動 (Trieb [Trieb]) 概念は、生物学的な本能 (Instinkt) と決定的に違うものとして概念化されたもの」(櫻村 1998: 196) であり、その含意が汲みとられるべきである、と。しかし、このように生物学的次元からの逸脱を語る議論は、他方で「種の再生産によって定義される自然の秩序」という前提を温存するか、あるいは不問に付している。その意味で性の多様性に対する評価こそ異なるものの、精神医学における性本能のモデルを暗黙裡に共有している。

本稿は、このような見方に対して、まず「生殖に結びつかない性」という立論自体が、フロイトのセクシュアリティ論の理解を根本において制約していることを論じ、次に精神分析における本能とセクシュアリティの特異な距離に注目することによって、「本能とセクシュアリティの統合」としての「性本能」概念との断絶を印づけるものである。

また、本稿はフロイトのいわゆる初期欲動論 (自己保存欲動/性欲動) を対象とするが、ここでの議論は後期欲動論 (生の欲動/死の欲動) の読解に向けた足掛かりとしての意義をもつ。フロイトの思想において「死の欲動」が出現したのは、本稿で論じるナルシシズムという概念が導入された数年後であったが、この点は、死の欲動という概念の構成にとって決定的に重要なのである。

2 精神医学における性本能概念の成立

上述の目的のため、本節ではまず、一般にフロイトの発見と称されてきた人間のセクシュアリティの可塑性/多様性への着眼が、すでに19世紀精神医学において誕生した性本能という概念に対してまったく新しいものではないという事実を確認する。

これまでの精神分析研究によれば、フロイトは欲動と本能というタームの区別をつうじて、人間の行動の柔軟性、とりわけ人間の性行動の可塑性を見据えたとされてきた。例えば、「本能という言葉で考えている事柄と、Trieb [欲動] という言葉で考えている事柄との区別をフロイトは明確にした……本能は生得的で無意識的、基本的に変更不能のものなので、

『本能』instincts という訳語をフロイトが考えていたことにあてはめるのは間違いである」(Bettelheim 1983=1989: 142-5)、と。

本能と違って「欲動は、番いになって生殖するという生物学的機能によって定められた目標に到達することなしに自分の満足を得てしまう」(Lacan 1973=2000: 237) ものであり、フロイトの論じる欲動を本能とみなすと「人間の性における目標の可変性や対象の偶発性を見落としてしまう」(Chemama and Vandermersch eds. 1993=1995: 334) 危険性がある。つまり、フロイトは性本能ではなく性欲動について語ることで、生殖という目的に比して多様な人間のセクシュアリティという独自の洞察を示したと言うのである。

だが、ここで「性本能」という概念の成立に関するフーコーの指摘とこの種のフロイト理解をすり合わせてみると、興味深い事実が浮かび上がってくる。すなわち、「栄養摂取器官に対応する感情、印象、空腹の力動が存在するのと同じように、生殖器官の機能に対応する性本能が存在する、という想定……〔つまり〕人間のセクシュアリティの自然への組み込み」(Foucault 1999=2002: 309, 強調引用者) が導入された時点において、すでに「性本能は、自然によって定められたその目的を、自然なかたちで超え出るもの」として観念されていたのだ、と。

その出現に際してすでに、「性本能とは、その正常なかたちにおいて、交接〔異性間の性交渉〕に対して過剰なものであり、部分的に交接をはみ出るもの」(Foucault 1999=2002: 309-10) であった。19世紀の精神医学において導入された「生殖器官の機能に対応する性本能」という仮定は、結果的に「快楽のメカニズムによって性本能が生殖行為から切り離される」(Foucault 1999=2002: 318) という事態を招く。

この快楽と生殖の切り離しは、性科学の検討においてしばしば指摘されるが (Lantéri-Laura 1979; Birkin 1988=1997)、フーコーの議論の重要性は、性本能という概念の構成にとって、この生殖に対する過剰さが内在的なものであったことを示唆しうる点にある。

性本能はまったく不可欠かつ基本的な機能であるのだから、動物と同じく人間においても、それが不変かつ完全であるはずだとアプリアリに断言されがちである。しかし、事情はこれと異なる。事実を観察することによって、おそらく予想以上に、この推測には明白な反証が見出されることになる。(Chevalier 1890: 325)

例えばこの性科学者の言に示されるように、性本能に対する「明白な反証」として見出されたはずの数々の逸脱は、この概念の有効性を少しも損なうことなく、正常な性本能の倒錯として性本能の活動の内に含みこまれた。生殖器官の機能に対応する性本能という仮

定に矛盾するような諸現象の観察によってすら、この仮定が放棄されなかったという点には注目すべきものがある。

精神医学において性本能という概念が浮上しつつあったころ、「逆転した性的感情」(Westphal 1869)や「生殖器感覚の倒錯」(Charcot et Magnan 1882)といった語が、性倒錯、とりわけ同性愛の解明に向けて提唱されていた。「性本能」について活発に論じたフランスの精神科医の一人は、これらの用語について次のような不満を漏らしている。

男色とは倒錯した性機能ではない。それは性機能などでは全くなく、肉欲の倒錯なのである。逆転した性本能と呼ばれているものは、要するに性本能の否定である。それに当てられるホモセクシュアリティという表現も、この現象に対する誤った考えに引きずられたものであり、同様に不合理なものである。(Féré 1899: 274-5、強調引用者)

ここでは同性愛は性本能の仮定に矛盾する事象であり、その意味でこれは「セクシュアリティ」と呼ぶべきではないと論じられている。しかし、「性本能の否定」とすら言われた同性愛も、結果的には性本能の倒錯／逆転の可能性として、この概念のうちに組み込まれた。性本能は性本能の否定でさえあるようなそれをもその現われとして含みこみ、なおも性本能として存立することができたのである。

つまり、しばしばフロイトの炯眼と称されるセクシュアリティの可塑性への着眼⁽²⁾は、性本能という概念に対抗するというより、むしろそれに当初から織り込み済みの要素であるにすぎない。

さらに、ドイツ語圏の性科学者らは、まさにこの「生殖器官の機能に対応する性本能」に相当するタームに、Trieb という語を用いていたのだ。例えば、「生殖腺の解剖－生理学のプロセスが生じる時期に、種の保存に寄与する衝動が個人の意識に現れる」ものが「性欲動 Geschlechtstrieb」であり (Krafft-Ebing 1894: 23)、「性欲動 (Geschlechtstrieb) と生殖本能 (Fortpflanzungsinstinkt) は、同一のプロセスの主観的な側面と客観的な側面とに相当する」(Moll [1897] 2007: 8) というように。

フロイトもまた、「生物学では人間や動物に性の欲求があるという事実を『性欲動 (Geschlechts-triebe)』という想定によって表現する」(Freud 1905: 33) として、性本能という生物学的見解を Trieb という語で表している。つまり、フロイトが Trieb というター

(2) たとえば市野川容孝は「性的欲望を性器愛という枠から解放しながら、性的倒錯、すなわち生殖＝種の再生産に結びつかない性愛、種から剥がれおちる性愛の中にも人間性を見いだしてゆくこと——それがフロイトの開示するラディカリズムである」(市野川 1996: 224) と述べている。

ムを選択したという事実自体をもって、精神分析が「性本能」をめぐる当時の枠組みに対抗するものであったと言うことはできない (Davidson 2004; Cotti 2006)。

3 「生殖に結びつかない性」

市野川は、フランス語のセクシュアリティ (sexualité) という語が、「生殖＝性器愛に還元される性ではなく、必ずしも生殖や性器に結びつくことのない性的現象を含意する概念として用いられ」る (市野川 1996: 231) ことを指摘し、フロイトのセクシュアリティ概念もまた、これと同型の前提に基づいていると論じる。

今日、さまざまなかたちでとりあげられ、フーコーもまたその歴史を繙こうとした「セクシュアリティ」という概念を正しく理解しよう。それは、フロイトがこの「三論文〔性理論のための三篇〕」で開示した性愛、すなわち「生殖という目標を無視して自由におこなわれる」性愛なのである。フーコーが問いただしたのは、このセクシュアリティという概念が構成される際に作動する権力の問題、つまり「セクシュアリティの装置」であり、フロイトもまたこの装置の内部に位置づけられる。(市野川 2000: 105-6)

ここで論じられているのは精神分析におけるセクシュアリティ概念の「拡大」⁽³⁾と呼ばれる理論的展開である。その意図とは、「言うまでもなく(子どもや性的倒錯者に見られる)生殖に結びつかない性的活動を性概念の内に取り込むことであり、それはフランス語の <sexualité> にも反映されている」(市野川 1996: 231)、と注釈されるわけだが、フロイトの欲動／本能論は、本当にこの当時の枠組みに回収されるのだろうか。

精神分析は「性的本能に固有の医学的テクノロジーという計画を取り戻した」(Foucault 1976: 157 =1986: 151) と論じたフーコーの理解に反し、精神分析の議論は、精神医学のセクシュアリティ概念に対して独自の展開をもたらしたというのがフロイトの持論である。

フロイトは同時代の性倒錯をめぐる議論について、「一般に承認されているその名称がすでに示すように、これ〔成人の性倒錯〕は疑いもなくセクシュアリティ (Sexualität) です。……それが性生活上の現象ではないと主張する勇気のある人はまだ一人もおりません」(Freud 1917: 332、強調引用者) とコメントし、それが「倒錯的な満足を得る行動が、

⁽³⁾ 「『セクシュアリティ (Sexualität)』の概念は——そして、それとともに性欲動 (Sexualtrieb) の概念は——むろん拡大されて、生殖機能にすんなりおさまらない多くのことを含み持つ」(Freud 1920: 55)。

やはりたいていは完全なオルガスムと射精とに終わる」(Freud 1917: 333) という点に依拠していることを指摘する。

つまり、当時かくもよく知られた議論とは、セクシュアリティと性器性 (Genitalität) を対立させるというより、性器性を起点とすることによって、「必ずしも生殖や性器に結びつくことのない」諸事象をセクシュアリティへと包含してゆくものであった。

しかし、フロイトは自らの立論を、性器性を起点として概念の範囲を広げる一般的な議論とははっきり区別している。「『性器的』でない、すなわち生殖とはなんの関係もない『性的な』ものを承認」(Freud 1917: 332) するというフロイトの主張に忠実であろうとするならば、それがセクシュアリティという概念を規定する基準そのものを、根底から変更することであったという点にこそ、留意すべきなのである (古川 2009)。

フロイトのセクシュアリティ概念が性器性を参照点としないとしたら、このタームの概念としての存立は、いかに担保されるのか。精神分析におけるセクシュアリティ概念の「拡大」が、この語の実質的な内容を霧散させる危険性を、フロイトは自覚していた。彼は、この「拡大」された概念の限定性を、性欲動／自己保存欲動という区分に託す。すなわち、性欲動 (セクシュアリティ) の概念は、自己保存欲動を対立項として定義しなおされたのである。

自己保存欲動とは、「栄養摂取や排泄の機能、……筋肉の興奮や知覚活動の機能」(Freud 1913 :409) 等の、自己の保存に役立つ諸機能の活動を指す。セクシュアリティが、その概念の「拡大」において性器以外のあらゆる器官へと広げられたことで、それぞれの身体器官 (系) は、自己保存欲動と性欲動の2つの欲動に属するというモデルが提起される。

フロイトによれば、すべての身体器官 (系) は、器官それ本来の「機能的役割 (ihre funktionelle Rolle)」に加えて「器官の性的な——性源的な——意義」を合わせもつ (Freud 1917: 319) のだ。ここで器官の性的な意義、すなわちセクシュアリティに属する側面が、その器官に備わった本来の機能的役割と対置されていることは重要である。

つまり、自己保存欲動はこの器官の合目的性に応じた生体諸機能の活動を内容としており、これこそが、性欲動の否定項を構成する。フロイトにおけるセクシュアリティとは、この身体諸器官 (系) の機能に対応した、自己保存と種の保存に役立つ生体諸機能の活動を対概念として規定されるのである。そして、一般に本能と呼ばれるものは、これら身体器官の機能に対応した生体諸機能の活動に根ざしたものにほかならない (「生殖器官の機能に対応した性本能」など)。

通常とは全く異質な、字義通りの意味で、フロイトにおけるセクシュアリティは本能ではないわけだ。われわれは、この本能ならざるものとしてのセクシュアリティという精神

分析独自の定義を出発点として、フロイトにおける本能とセクシュアリティの関係を探ることで、フーコーが分析した精神医学における「性本能」概念とフロイトの「性欲動」の異同を明らかにする。

4 補助線としての不安論

本稿がこの課題の探求において着目するのは、フロイトの枠組みにおいて、自己保存欲動と性欲動という2つの欲動が、それぞれ「現実不安」(Realangst)と「神経症的不安」(neurotische Angst)という2種類の不安に対応しているという点である。上で確認した通り、フロイトにおける本能とセクシュアリティは、自己保存欲動と性欲動に相当し、この欲動二元論の構造を通じて論じることができる。そして、この自己保存欲動と性欲動の関係は、現実不安と神経症的不安という2つの不安の関係を通して読み解けるのである。

現実不安とは、「危険に対する反応……として、すんなり理解できる」(Freud 1933: 89)不安であり、その意味で「現実不安は自己保存欲動の現れ」(Freud 1917: 408)であるとされる。これに対して、神経症的不安とは、諸々の神経症における不安に相当し、「いかにも謎めいていて、何のためのものか分からないもの」(Freud 1933: 89)である。フロイトはこの不安に、「使用されないリビードから生じる」(Freud 1917: 423)という特異な発生機制を想定することで、これを性欲動に対応させる⁽⁴⁾。

現実不安が、危険に対する情動として「すんなり理解できる」のに対し、神経症的不安は、その対象や発生理由が不可解である。この理解可能性は、不安が生じた状況において、それを「起こしてしかるべき恐ろしい出来事が見出され」うるか否かによって決まる。このような情動とその対象との合理的な釣り合いを、フロイトは「心因」(Freud 1895a: 333)と呼ぶ。ある情動がそれを引き起こすにふさわしい対象によって生み出されたとき、その情動は心に由来するという意味で、心因性の情動である。つまり、通常の心的因果性において合理的とされる情動と対象の結びつきが、心因というタームの含意であり、不安の理解可能性はこれによって換言できる。常識的に理解しやすい現実不安は心因性の不安であり、不可解に思われる神経症的不安は、非-心因性の不安なのである。

実のところフロイトの不安論の特色は、この非-心因性の不安という観点の提起にある(古川 2010)。これによれば、他のあらゆる情動はそれを引き起こすにふさわしい対象と結

⁽⁴⁾「精神分析においてリビードが意味するのは、まず、対象に向けられた(分析理論によって拡大された意味での)性欲動の……力である」(Freud 1923b: 420)。

びついた心因性の情動であるのに対し、不安という情動は（現実不安を除き）、基本的に心ではなく「心から方向を逸らされた身体的な性的興奮」（Freud 1895a: 336）に由来する非-心因性の情動であると規定されるのである。

ここで参照されるモデルとは、次のようなものである。身体的な性的興奮は通常、ある心的表象と結びつくことによって、愛情や怒り、悲しみといった心因性の情動となるのだが、このプロセスが何らかの要因によって妨げられたとき、それは一律に不安という非-心因性の情動に変わる。つまり、不安とは心的表象との結びつきをもたない情動なのである。これは、不安という情動が、ある対象との結びつきによって引き起こされるのではなく、対象を欠いたまま、対象に先立って生じると言うに等しい。

このような情動論の構成によって見出された対象をもたない情動としての不安が、性欲動に由来する非-心因性の不安なのであり、現実不安／神経症的不安の対における神経症的不安に相当する。すなわち、欲動論との密接な関連における不安論は、しかるべき対象をもつ心因性の不安（現実不安）と、対象に先立つ非-心因性の不安（神経症的不安）の関係を通じて読解が可能になるのである。

ここで注目されるのが、「恐怖症」をめぐるフロイトの議論である⁽⁵⁾。恐怖症とは、ある対象（状況）に対する度を越した不安によって特徴づけられる神経症であり、そこでは「外的危険とのある種の結びつきはなんとか認められはするものの、これに対する不安が極端に誇張されている」（Freud 1933: 88）。つまり、恐怖症においては、合理的な不安の対象が見出されはするものの、その対象と不安の関係には非合理的な要素が混入している。この両義性において、恐怖症の不安は、正当な対象をもつ現実不安と対象を欠いた神経症的不安の関係を考察するための有益な手がかりとなる。

当初、恐怖症は「強迫（強迫表象）」と同じ機制をもつと考えられていた（Freud 1894）。強迫とは、例えば疑い、後悔、怒りなどの情動と、さまざまな表象が結びついて患者を圧倒する状態を指す。強迫において特徴的なのは、この情動が一定であるのに対し、それと結びつく表象は変化するという点、そして表象と情動の結びつきが不釣り合いで奇妙に見えるという点である。

精神分析において、これらの神経症は「抑圧」という心的機制を通じて理解される。それは、耐え難いほど強い情動と結びついた出来事の記憶に対し、「表象と情動の分離」（Freud 1894: 72）をもって防衛するという試みである。この抑圧において、ある心的表象と結び

⁽⁵⁾ フロイトの疾病分類において現勢神経症と精神神経症の区分を往来した「恐怖症」概念の興味深い変遷については、Laplanche ([1980] 2006: 118-25, [1980] 2009: 293-300) を参照。

ついていた情動はそこから引きはがされ、他の新たな表象と結びつくか、あるいは表象との結びつきを一切失うことになる。

フロイトによれば、強迫の特徴となるのは、表象と情動の「誤った結合」である。抑圧において「表象を情動から引き離そうとすることが行われる場合……その表象から自由になった情動は、それ自体は〔自我と〕相容れなくはない他の表象と結びつく」(Freud 1894: 65-6、強調原文)。強迫の奇妙さは、このようにして成立した「〔情動からの表象の分離とその情動の誤った結合〕」(Freud 1894: 67)に帰せられる。

重要なのは、強迫の「情緒状態〔情動〕そのものはつねにしかるべき理由をもって」(Freud 1895b: 346、強調原文) いることである。つまり、強迫における情動は、元々、正当な対象と結びついた合理的な情動であり、それが別の誤った表象へと移し替えられたのだ、と。

恐怖症の機制もこれと同じであるなら、その不安は、元々しかるべき対象（危険）と結びついた心因性の不安（現実不安）だったということになる。そうすると、その過剰で非合理的な側面は、不安が「それにふさわしくない表象と結びついている」(Freud 1894: 68、強調引用者) ことに帰せられる。この時点で恐怖症の不安は、いわば「対象をまちがえた現実不安」として解釈されているわけだ。

だが、この後、フロイトは強迫と恐怖症の違いを強調することで、この理解を覆してゆく (Freud 1895b)。恐怖症の不安は、しかるべき対象と結びついていた心因性の不安が、別の誤った対象へと移し替えられたものではない、と。恐怖症において観察されるのは、対象に先立つ不安、つまり「不安に満ちた情緒状態」であり、これが、ある種の選択によって (par une sorte d'élection)、恐怖症の対象となるにふさわしいありとあらゆる観念〔表象〕を生じさせる」(Freud 1895b: 352、強調原文) のだ、と。

不安はもとの対象から別の対象へと移されたのではない。不安には元々の対象というものが存在しないからだ。対象をもつ不安とは、それにふさわしい対象を選び出し、それと結びつくことで二次的に成立したものなのだ。つまり、対象と結びついた理解可能な不安（現実不安）は、元来、対象をもたない非合理的な不安（神経症的不安）として生み出されたものであった。

フロイトはこの議論を「ハンス少年」の症例で再論している。これは、5歳のハンス少年が乳母と散歩に出たときに突然不安に襲われ、その後、馬を怖がり始めるという恐怖症の発生を分析したものである。この事例においてフロイトはまず、少年に対象のない不安が生じるという段階に注目する。それは第一に、「不安とその諸対象との間の関係が二次的に作られたもの」(Freud 1909: 357、強調引用者) であるという点を解明するためである。

つまり、「〔不安と対象を結びつけるという〕これらの特殊な解決法のための素材は、我々

の幼い患者〔ハンス〕の場合、明らかに、中央税関の向かい側に住まいが位置しているために彼が一日中目にしている印象から取られている」。少年の家は馬車の往来をつねに目にするような場所にあったため、「馬は、ただ偶然によって〔ハンスを〕怖がらせるものという役割に入り込んでしまったらしい」（Freud 1909: 353、強調引用者）のである。

第二にフロイトは、ハンスが不安発作の数日前に、母親がいなくなるという不安な夢を見ていることに注目する。彼はこの事実、ハンスの母親への愛情が高じていたことを読みとり、「母親に対するこの高まった情愛こそ、不安へと転化したのであり、我々の言葉では抑圧された」（Freud 1909: 261、強調引用者）と述べるのである。ここでは、対象を欠いた不安の発生についての重要な視点が提起されている。ハンスの場合、対象に先立つ不安の起源は、母親への愛着であったとフロイトは言う。

これはハンスの場合、「リビードを帯びた憧憬が不安へと転化」（Freud 1909: 367）したと記述される。つまり、母親への愛着という心因性の情動が、抑圧によってその対象（母親という表象）から引きはがされたとき、この情愛は不安に変わる。このような独特の発生機制ゆえに、「抑圧された性的な憧憬に対応するこの不安は、子供の不安がどれもそうであるように、当初対象を欠いて」（Freud 1909: 261、強調引用者）いるのである。

5 不安論と欲動論の交錯

このような不安の発生は、次のように換言される。すなわち、抑圧によって「リビードが憧憬として現在のところ使用できなくなっている」（Freud 1917: 424、強調引用者）とき、それは不安に変わるのだ⁽⁶⁾、と。つまり、神経症的不安が「使用されないリビードから生じる」と言われるときの独特の語法は、これを指す。恐怖症の分析において見出されたポイントは二つある。まず、正当な対象をもつ現実不安と思われるものが、もとは対象に

⁽⁶⁾ ハンスのこの不安に満ちた状態をフロイトは「不安ヒステリー」と名づけた。これは「心的興奮を身体上の神経支配へと転換する」（Freud 1894: 68、強調原文）ことで、症状が身体の障害（失声、歩行障害等）として現われる「転換ヒステリー」と対比される。

立木康介はこの両者の相違を「転換ヒステリーにおいては、無意識の葛藤が身体症状に「転換」されるのにないし、不安ヒステリーにおいては、そのような葛藤を引き起こしていたエネルギーが身体のうちにはけ口を見つけないことができず、不安という形で放出される」（立木 2007: 161、強調引用者）と述べている。しかし、不安ヒステリーにおいて問題となっているのはむしろ、心的領域に到達できない興奮である。もともと心的表象と結びついた心因性の情動としての「憧憬」は、抑圧によって表象から切り離されることで、「心から方向を逸らされた身体的な性的興奮」（Freud 1895a: 336、強調引用者）となる。転換ヒステリーにおいて、神経支配へと「転換」されるのが心的興奮であると明言されるのとは対照的に、不安ヒステリーでは、心的興奮ではなくなった情動が不安として現われるのである。現勢神経症／精神神経症という区分をつけて、この点を詳しく論じた古川直子（2010）も参照。

先立って生じた神経症的不安として生じたものであり、それがもっともらしい対象と二次的に結合したものだ、という点。

そして、この対象を欠いた不安の起源は、ある対象と結びついていた心因性の情動（ハンスの場合、母への「憧憬」）が、抑圧によってその対象から切り離されたところに見出されるという点。このように把握された恐怖症の不安は、「使用できないリビードが、たえず見かけだけの現実不安（scheinbare Realangst）に変えられ、その結果、ささいな外的危険がリビードの要求を代表するために設定され」（Freud 1917: 424）たものと定式化される。つまり、恐怖症の不安は、「使用できないリビード」から生じた神経症的不安であるにもかかわらず、現実不安に見えるのである。

だが、もし現実不安に見える神経症的不安が存在するのであれば、本当の現実不安と、見かけだけの現実不安はどうやって区別されるのか。ここで特に問題となるのが子供の不安である。子供は一般に不安を抱きがちだが、それが「神経症的不安なのか現実不安なのかの区別は、なかなかつきにくく、そもそも「そうした区別をすること自体に意味があるのかどうか怪しくな」（Freud 1917: 421）る。無力な子供にとって、その周囲の環境は危険に満ちているため、その不安は当然、危険に根差した現実不安であるように思われる。しかし、フロイトはまさに恐怖症の分析に依拠して、これに異を唱える。

フロイトによれば、子供の不安は危険に対する現実不安ではない。「そうではなくて、子供が見知らぬ人をこわがるのは、自分の愛する馴染んだ人、基本的には母親の姿を目の前に見出せると思いついていたからなのです。不安へと変じたのは、子供の失望と思慕、つまり使用されえなかつたリビードです」（Freud 1917: 422）、と。すなわち、子供の不安は、恐怖症の不安と同じく「神経症的不安が見かけだけの現実不安に変わ」（Freud 1933: 91、強調引用者）ったものなのである。

そして、まさに恐怖症から子供の不安へと論が敷衍されるこの地点において、独特の不安論が欲動論の展開へと効いてくる。もし子供に危険に対する反応としての本当の現実不安が存在するならば、それは人間が「外部から迫る危険に対する本能的な認識（instinktive Erkenntnis）」（Freud 1926: 201）を生まれもっているということの意味する。つまり、人間は生得的に「生存本能」を備えているといえることができるわけだ。

子供は、正真正銘の現実不安というものをほとんどもちあわせていないようです。……子供がもし、命を守るためのこの種の本能をもっとたくさん遺伝として身につけていたのであれば、そのほうがずっと望ましいにちががなく、子供が次から次に危険にさらされるのを防ぐために看視しなければならないという課題も、それによってずっと楽

なものになることでしょう。

しかし実際は、子供ははじめ、危険というものを知らないので、自分の力を過大に見積もり、不安を感じないで振る舞います。放っておけば、川っぶちを走ったり、窓の手すりによじ登ったり、尖ったものや火をおもちゃにしたり、けがをしそうで保護者をひやひやさせるようなことを何でもします。子供に現実不安が目覚めてくるのは、すべて教育のなせるところです。(Freud 1917: 423、強調引用者)

フロイトによれば、現実不安は自己保存欲動の現れであった。この現実不安と自己保存欲動の特別な対応を踏まえるなら、ここでの「命を守るためのこの種の本能」(lebensschützende Instinkte) という語が、自己保存欲動 (Selbsterhaltungstrieb) という精神分析の術語の代わりに現れていることは明らかである。では、なぜフロイトは、自身のごく稀にしか使用しない本能というタームを、わざわざここで選んだのだろうか。

この引用には、奇妙な議論が続く。すなわち、「ところで、不安を察知するためのこうした教育をいくぶん受け入れすぎらるゝ子供、さらには注意するよう教えられなかった危険さえ自分で見つけ出すような子供がいるとしますと、そうした子供は、体質的にリビード的欲求が強くして生まれてきたか、あるいは早期に甘やかされてリビードの満足を与えられすぎたかのどちらかだと説明でき」(Freud 1917: 423、強調引用者)る、と。

つまり、フロイトによれば、子供が「ほとんどもちあわせていない」現実不安を目覚めさせ、その実質を請け負うのは、「使用されないリビード」に由来する神経症的不安なのである。子供の不安をめぐる議論の要点は、それが現実不安という外観をとりながらも、実はリビードに由来する神経症的不安であるという独自の着眼にあった。神経症的不安は、もともと対象をもたない。対象に先立って生じるこの不安は、現実に自己保存をおびやかす危険をその対象として選び出し、二次的に結合することで、危険に対する反応としての現実不安であるかのように働く。このようにして、神経症的不安は、現実不安の機能を肩代わりするわけだ。

つまり、子供における現実不安、すなわち生存本能の実質を担うのはリビード(性欲動)なのである。ここにおいて、われわれが出発点とした「現実不安：神経症的不安＝自己保存欲動：性欲動」という対応式による、不安論と欲動論の真の照応が明らかになる。現実不安が「見かけだけの現実不安」にすぎず、その正体が神経症的不安であるならば、自己保存欲動は見かけだけの自己保存欲動にすぎず、その内実は性欲動であるという洞察がそれである。

この関係はただ類比によって導き出されたものというより、フロイトの欲動論の核とし

て機能している。それは、ナルシズムという概念の導入によって見出された、「自我は脱性化された (desexualisierte) エネルギーによって動く」(Freud 1926: 194) という定式において示される。フロイトにとってのナルシズムとは、「自我はリビードの元々からの本来的貯蔵庫」(Freud 1920: 55-6) だという概念モデルである。

フロイトによれば、「自我は、自己保存という任務を持ち……この課題を果たす」(Freud 1938: 68) ものである。つまり、自己保存欲動とは「自我の自己保存欲動」(Freud 1920: 6、強調引用者) なのである。その自我が、「リビード」で満たされているというモデルが採用されたことで、「自己保存欲動もまたリビード的本性のもの」(Freud 1920: 56) ということになる。

そのように自我のうちに滞留するとき、リビードはナルシス的と呼ばれた。このナルシス的リビードはもちろん、精神分析的な意味で性欲動の力の発現でもあるが、それはまた、そもそもの始まりから認められていた『自己保存欲動』と同一視されざるをえなかった。(Freud 1920: 56、強調引用者)

つまり、これまで自己保存欲動であると考えられていたものは、実のところナルシス的リビード、すなわち性欲動のエネルギーであった。今まで自己保存欲動と呼ばれていたものは、見かけだけの自己保存欲動にすぎなかったのだ。自己保存欲動の内容たる生体諸機能は、その活動の実質を性欲動によって担われているのである。

J・ラプランシュによれば、「人間の場合、その一部が衰えてしまった自己保存の活動を担うのは、セクシュアリティである」(Laplanche 1987: 62)。換言するなら、生存本能の活動は、セクシュアリティによって支えられ、補われるわけだ。これこそ、不安論を補助線とした欲動論の読解から得られた、本能とセクシュアリティをめぐる定式である。

人間が「それほど多くもって生まれてきてはいない」本能の空白を、セクシュアリティが補い、支え、肩代わりする。そのようにして、性欲動をその実質とする自己保存欲動が芽生えるというのが、本能とセクシュアリティの関係をめぐる精神分析の特異な見解である。

つまり、「彼〔フロイト〕はこの言葉〔本能〕をいちども書いていない」(Lacan 1966=1981: 356) というのではなく、フロイトのテキストにおいて「本能」と「欲動」というタームが構成する特異な関係こそが、欲動論の真の射程を示しうるのである。

「自我は脱性化されたエネルギーによって動く」という定式は、先の読解を踏まえてはじめて理解可能になる。「脱性化された」という表現は、それがもともと性的であったということを必然的に含意する。つまり、自我のエネルギーは「脱性化されたリビード」(Freud

1923a: 274、強調引用者)なのであり、ここでは自己保存欲動と性欲動、すなわち本能とセクシュアリティの関係をめぐる上記の把握が換言されているのである。

そして、このナルシズムという自我の活動を担うものとしての性欲動という視点の導入を契機として、生の欲動／死の欲動の後期欲動論への展開が開始される。ナルシズム論においてフロイトが発見したのは自我と協調する性欲動であったが、初期の研究から自我にとって外傷的に作用する要因として見出されたのもまた性欲動であった(古川 2013)。この矛盾を解消すべく導入された後期欲動論における死の欲動とは、ナルシズム論によって失われつつあった外傷的な性欲動そのものなのである(Laplanche 1987: 142)。

6 結論

さて、では「生殖器官の機能に対応する性本能」は、この理論枠組みにおいてどのように位置づけられるのか。フロイトによれば、当初は独立して各器官の快が求められていた状態から、発達をへて、「それらの統合が行われてはじめて生殖機能に役立つようになる。こうして性欲動は性欲動として一般に認められるようになる」(Freud 1915: 218)。

ここで語られているのは「性欲動として一般に認められる」性欲動、すなわち生殖器官の機能に対応するとされる性本能の出現である。この「統合」はしばしば、フロイトにおける「正常化への意志」(Foucault 1976: 157=1986: 151)の現れと見なされる。例えば、「彼が性器期へと向かう発達という考えを導入するとき、そこには明らかに『正常という規範』が入り込んでいる」(十川 2003: 65)、と。だが、ここでの彼の議論は、全く異なる観点からの理解を要するものである。

フロイトにおける性欲動(セクシュアリティ)が、各器官(系)に備わった本来の機能的役割と対置されるという意味で、いわば本能ならざるものとして規定されていることを先に見た。ここで彼は、その本能ならざるセクシュアリティが、いかにして見かけだけの性本能として働くことになるかを述べているのだ。つまり、精神分析のモデルによれば、セクシュアリティは見かけだけの自己保存欲動として、生殖以外の生体諸機能を補い、その実質を担うのと同様に、生殖器官の機能に対応する性本能の内実を請け負うのである。

例えば、「リビードが、どのように種の保存に役立つ生理学的機能へと編成されていくか」(Freud 1938: 79)という記述は、先の「ナルシ症的自己保存欲動」の議論と合わせて読まれることを要求する。つまり、種の保存に役立つ生殖機能がリビードによって担われるとするなら、個体の保存に役立つ生体諸機能もまた同じくリビードによって遂行されるのであった。それこそ、セクシュアリティが「生殖機能のみならず、あらゆる生活形成にとつ

て計り知れないほど重要な意味を持つ機能」(Freud 1938: 114、強調引用者)である所以である。

セクシュアリティというものは、単に生殖のために役立つ機能で、消化や呼吸などと肩を並べる機能だというよりも、何かはるかに独立的なもののように思われてくる。それはむしろ、個人の他のすべての活動に対置されるもので、制約の多い複雑な発達を経て初めて、個人の経済という連合体のなかに強制的に組み入れられる。(Freud 1913: 409、強調引用者)

つまり、セクシュアリティは「統合」を経て生殖機能に組み入れられるのと同じく、これと平行な拘束をへて、個体の保存に役立つ生体諸機能に組み入れられるわけだ。ここまで来たところで、フロイトの精神分析と、フーコーが分析した精神医学における「本能とセクシュアリティの統合」の決定的な断絶が明らかになる。というのも、通常は異論の余地なく正常な性本能の現われと見なされるような現象（「生殖機能に役立つ対象愛」[Freud 1911: 237]）の背後にすら、フロイトはその存在を認めないからだ。フロイトは「性的欲望を性器愛という枠から解放しながら、性的倒錯、すなわち生殖＝種の再生産に結びつかない性愛、種から剥がれおちる性愛の中にも人間性を見いだしてゆく」（市野川 1996: 227）といった理解に反して、彼は、そもそも「生殖に結びつかない性」という表現が前提とする認識を覆したのだ。

生殖という目的からの逸脱の可能性をどれだけ広く、多様に認めたところで、性本能（セクシュアリティ）は、それがもともと「生殖器官の機能に対応する」ものであるという統一性を失うことはない。いわゆる性倒錯は、「本来、種という生命の統一体に向かうはずの性が、種そのものから剥がれ落ちてしまう」（市野川 1996: 222、強調引用者）ものとして、いくらでも理解可能だからだ。それを病理や異常と見なすにせよ、よりリベラルに「われわれ皆が……倒錯の傾向も持つ」（十川 2003: 65）と捉えるにせよ、フロイトにおける真の争点はそこにはない。フロイトは身体器官（系）の諸機能に対応する本能という切り口を軸に、本能の活動の内実を、本能ならざるものが肩代わりするという特異な関係を、まさにセクシュアリティというタームを通じて描出してみせた。本能とセクシュアリティの統合としての「性本能」に対し、精神分析におけるセクシュアリティとはまさに、この概念の統一性を根本から瓦解させるものであったのである。

参考文献

- (フロイトの引用については、適宜『フロイト全集』(岩波書店)、『フロイト著作集』(人文書院)を参照し、主な用語に関しては、基本的に前者に準拠した。)
- Bettelheim, B., 1983, *Freud and Man's Soul*, New York: Knopf. (= 1989, 藤瀬恭子訳『フロイトと人間の魂』法政大学出版局。)
- Birkin, L., 1988, *Consuming Desire*, New York: Cornell University Press. (= 1997, 太田省一訳『性科学の誕生』十月社。)
- Brown, N. O., 1959, *Life Against Death*, Connecticut: Wesleyan University Press. (= 1970, 秋山さと子訳『エロスとタナトス』竹内書店新社。)
- Charcot, J-M et V. Magnan, 1882, "Inversion du sens génital," *Archives de neurologie*, 3 (7): 53-60.
- Chemama, R., and B. Vandermersch eds, 1993, *Dictionnaire de la psychanalyse*, Paris: Larousse. (= 1995, 小出浩之ほか訳『精神分析事典』弘文堂。)
- Chevalier, J., 1890, "De l'inversion sexuelle aux points de vue clinique, anthropologique et médico-légal," *Archives d'anthropologie criminelle*, 5: 314-36.
- Cotti, P., 2006, "«Gibt es triebe?»: Un débat de la science allemande avant 1905," *Evolution psychiatrique*, 71 (1): 87-96.
- Davidson, A., 2004, *The Emergence of Sexuality*, Cambridge: Harvard University Press.
- Féré, C., 1899, *L'instinct sexuel*, Paris: Alcan.
- Foucault, M., 1976, *Histoire de la sexualité I*, Paris: Gallimard. (= 1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社。)
- , 1999, *Les Anormaux: cours au Collège de France 1974-1975*, Paris: Gallimard. (= 2002, 慎改康之訳『異常者たち ミシェル・フーコー講義集成 V』筑摩書房。)
- Freud, S., 1894, "Die Abwehr-Neuropsychosen," *Gesammelte Werke I*, S. Frankfurt am Main: Fischer. (以下, 「G.W. 巻数」と略記)
- , 1895a, "Über die Berechtigung von der Neurasthenie einen bestimmten Symptomenkomplex als 'Angst-neurose' abzutrennen," G.W. I.
- , 1895b, "Obsessions et Phobies," G.W. I.
- , 1905, "Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie," G.W. V.
- , 1909, "Analyse der Phobie eines fünfjährigen Knaben," G.W. VII.
- , 1911, "Formulierungen über die zwei Prinzipien des psychischen Geschehens," G.W. VIII.
- , 1913, "Das Interesse an der Psychoanalyse," G.W. VIII.
- , 1915, "Triebe und Triebchicksale," G.W. X.
- , 1917, "Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse," G.W. XI.
- , 1920, "Jenseits des Lustprinzips," G.W. XIII.
- , 1923a, "Das Ich und das Es," G.W. XIII.
- , 1923b, "Kurzer Abriss der Psychoanalyse," G.W. XIII.
- , 1926, "Hemmung, Symptom und Angst," G.W. XIV.
- , 1933, "Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse," G.W. XV.
- , 1938, "Abriss der Psychoanalyse," G.W. XVII.
- 古川直子, 2009, 「『セクシュアリティ』概念再考」『ソシオロジ』54 (1): 19-35.
- , 2010, 「精神分析の情動論の基盤」『京都社会学年報』18: 17-39.
- , 2013, 「精神分析における自己の物語論的構成」『ソシオロジ』58 (1): 53-69.
- Hocquenghem, G., 1972, *Le Désir homosexuel*, Paris, éditions Universitaires. (= 1993, 関修訳『ホモセクシュアルな欲望』学陽書房。)
- 市野川容孝, 1996, 「『種』から剥がれおちる性」『imago』7 (3): 216-32.
- , 2000, 『身体/生命』岩波書店。
- 樫村愛子, 1998, 『ラカン派社会学入門』世織書房。
- Krafft-Ebing, R., 1894, *Psychopathia sexualis*, 9. Auflage, Stuttgart: Enke.
- Lacan, J., 1966, *Ecrits*, Paris: Seuil. (= 1981, 佐々木孝次・海老原英彦・芦原春訳『エクリ III』弘文堂。)
- , 1973, *Le séminaire, livre XI*, Paris: Seuil. (= 2000, 小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳

【精神分析の四基本概念】岩波書店。）

Lantéri-Laura, G., 1979, *Lecture des perversions*, Paris: Masson.

Laplanche, J., 1987, *Nouveaux fondements pour la psychanalyse*, Paris: PUF.

———, [1980] 2006, *Problématiques I*, Paris: PUF.

———, [1980] 2009, *Problématiques II*, Paris: PUF.

Marcuse, H., 1955, *Eros and civilization*, Boston: Beacon Press. (= 1958, 南博訳『エロスの文明』紀伊国屋書店.)

Moll, A., [1897] 2007, *Untersuchungen über die Libido sexualis*, Band 1, Teil 1, Boston: Adamant Media.

十川幸司, 2003, 「精神分析に公正であること」『現代思想』31 (16): 62-71.

立木康介, 2007, 『精神分析と現実界』人文書院.

Westphal, C., 1869, "Die Konträre Sexualempfindung," *Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten*, (2): 73-108.

Wright, E., ed, 1992, *Feminism and Psychoanalysis*, New York: John Wiley & Sons. (= 2002, 岡崎宏樹・櫻村愛子・中野昌宏訳者代表『フェミニズムと精神分析事典』多賀出版.)

(ふるかわ なおこ・日本学術振興会特別研究員)

Dismantling the Concept of “Sexual Instinct”: Freud’s Theory of Sexuality

Naoko FURUKAWA

This article is a reappraisal of the psychoanalytic theory of sexuality. It is commonly held that Freud’s main contribution to the study of human sexuality lies in its focus on the non-reproductive sexual behaviors. But the psychiatrists and sexologist before Freud were already well aware of “perverse” sexualities. Arguing against the above view, this article tries to elucidate the radical break between psychoanalysis and 19th-century psychiatry regarding sexuality.

We start from Foucault’s insightful analysis of the construction of “sexual instinct” in 19th-century psychiatry; “the twin theory of instinct and sexuality” developed as the epistemologico-political task of psychiatry. Foucault examined how this “unification” of instinct and sexuality was brought about from around 1840-50.

Focusing on the relationship of instinct and sexuality, we compare Freud’s psychoanalysis with this contemporaneous formation of the sexual instinct in psychiatry. Critically examining preceding studies about the terminological distinction of *Trieb* (drive) and *Instinkt* (instinct) in Freud’s texts, we will show that Freud’s conceptualization about instinct and sexuality has evolved within a totally different framework from the sexological unification of the two. The key to the understanding of Freud’s drive theory lies in his argument about anxiety.

Sexuality, in the proper sense of the word in Freud’s terminology, functions as a substitute for the instincts which constitutionally a human being largely or completely lacks.